

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530618

研究課題名(和文)ボードリヤールの社会理論の再構成、及びその受容と影響についての批判的検討

研究課題名(英文)The Reconstruction and the Critical Investigation into Reception and Influences of Baudrillard's Social Theory

研究代表者

水原 俊博(MIZUHARA, Toshihiro)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：10409542

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究の課題は「ボードリヤールの社会理論の再構成、及びその受容と影響についての批判的検討」である。研究は具体的には(1)ボードリヤールの一次文献を精査して、(2)研究の手薄であった「悪」「不可能な交換」といった諸概念を明確化し、(3)ボードリヤールの社会理論を情報社会論的な視点から理論的に再構成する。さらに、(4)ボードリヤールの社会理論の多方面での影響を整理して、その社会的、文化的意味を明らかにし考察する。以上の研究については、学会発表、学術論文として概ね成果をあげることができた。とはいえ、(4)は十分な成果をあげたとはいえ、本研究の最終目標である著書執筆を果たせず、今後課題を残した。

研究成果の概要(英文):The purpose of this research is to reconstruct the social theory of Baudrillard, a French sociologist and thinker, and to investigate how his theory has been socially and culturally received and influenced. First, his profound concepts such as 'evil', 'impossible exchange', 'perfect crime' and so on are clarified theoretically and embodied by examining his latter writings especially and through some case studies. Secondly, his social theory is reconstituted as the theory of information (high tech, simulation) society from the point of view of media theory, not as the theory of consumer society. Thirdly, it is investigated critically how his theory has been received and influenced in various social and cultural arenas around the world such as media communication and culture, art, architecture and so on. These studies resulted in the conference presentations and the treatises, though the result of these studies is imperfect in some respects and is not integrated as one book.

研究分野：社会理論, 消費社会学, 情報社会論, 社会調査法

キーワード：シミュレーション ポストモダン 不可能な交換 情報化

1. 研究開始当初の背景

本研究の課題は「ボードリヤールの社会理論の再構成、及びその受容と影響についての批判的検討」である。本項では以下、(1)本研究が念頭においた現代の社会状況(情報社会化)について、さらに、(2)ボードリヤールに関する理論研究について述べる。

(1) 1990年代以降、情報技術やそれに関連する科学技術(遺伝子工学にもとづくクローン技術や再生医療技術、ロボット技術、人口知能など)が目覚ましい発展をとげ、社会や文化のあり方が大きく変化してきた。とりわけ、実空間から擬似空間(webなどメディア技術が形成する仮想空間)へと、人間活動の領野は拡張を続け、社会的現実(社会的なるもの)が情報化されていった。だが、そうした情報化の様態、それによる社会的現実の変容について、これまでの社会学的な説明は必ずしも十分とはいえない。

(2) 他方、ボードリヤールの社会理論は、これまで、1970年代(前期ボードリヤール)、1980年代(中期ボードリヤール)の著作(『物の体系』『消費社会の神話と構造』『記号の経済学批判』『象徴交換と死』『シミュレーションとシミュラクル』など)の検討から、記号論的消費社会論として捉えられ、社会学など多様な分野で批判的に継承されてきた。しかしながら、90年代以降の著作(『透きとおった悪』『不可能な交換』『完全犯罪』『悪の知性』『なぜ、すべては消滅しなかったのか』など)で展開される社会理論(後期ボードリヤール)については、記号論的消費社会論として捉えることは難しく、「不可能な交換」「悪」「完全犯罪」など社会理論では耳慣れない用語や造語が駆使されていることもあり、これまで十分に検討されてこなかった。とはいえ、後期ボードリヤールの断片的な記述は、現代の情報社会のありさまを説明する上で示唆的であることが少なくない。こうしたことから、本研究では、変動してやまない現代の情報社会を念頭に、ボードリヤール、とりわけ後期ボードリヤールの社会理論を中心に検討し、その社会理論を情報社会論として再構成することを目指した。また、本研究では、後期ボードリヤールの社会理論の理論的検討において、ボードリヤールと同時代の他の社会理論との関係性を吟味することで、ボードリヤールの社会理論の理論的特徴を剔抉すること、さらに、文化、社会、芸術などの諸領域において、ボードリヤールの社会理論が、これまでどのように受容され、どのような影響をあたえてきたのかを明らかにすることも課題とした。

2. 研究の目的

前項で述べたような背景、問題関心から、本研究の課題「ボードリヤールの社会理論の再構成、及びその受容と影響についての批判的

検討」を設定した。これにより、これまで断片的に捉えられることが少なくなかったボードリヤールの社会理論、とりわけ、後期ボードリヤールの社会理論の全体的な構図、他の社会理論との関係性、内外の諸領域での受容と影響を検討し、明らかにすることを、本研究では目指した。ボードリヤールの社会理論は、内外の諸分野での影響が決して小さくないものの、本研究のような総合的かつ情報社会論的視点からの研究は内外になく、その点に本研究の意義があるといえよう。

3. 研究の方法

本研究では、ボードリヤール、とりわけ、1990年代以降の後期ボードリヤールの社会理論を、情報社会論として再構成することが主要な研究課題である。そのため、ボードリヤールの一次文献(原著)さらに、ボードリヤールの著作を検討した内外の二次文献、同時代の社会理論やそれに関連する多様な文献を精査(テキスト・クリティーク)することに、主に取り組んだ(文献研究)。また、本研究は情報技術やそれに関連する科学技術が飛躍的に発展をとげる現代の社会状況、つまり情報社会を念頭におこなうため、そうした動向を扱う文献、資料も収集し、検討した。

4. 研究成果

繰り返しになるが、本研究の課題は「ボードリヤールの社会理論の再構成、及びその受容と影響についての批判的検討」である。研究の具体的な取り組みの概要は以下のとおりである。(1)ボードリヤールによる文献、とりわけ、90年代以降の未邦訳を含む文献(一次文献)を精査して、(2)研究の手薄であった悪、不可能な交換といった諸概念を明確化し、(3)後期ボードリヤールの社会理論を情報社会論的な視点から理論的に再構成する。さらに、(4)ボードリヤールの社会理論の内外の諸領域での受容と影響を整理して、その社会的、文化的意味を明らかにし考察する。以下では、これらの各具体的な課題について研究成果を説明する。

(1)後期ボードリヤールの一次文献の精査については、叙述、内容が難澁を極めたため、当初の予想をはるかにこえて研究は難航し、研究期間の前半を費やさざるをえなかった。また、そこでは、こうした困難を打開することも目的として、後期ボードリヤールの二次文献や関連文献の検討もおこなった。その結果、後期ボードリヤールの社会理論の全体的な構図を描くことができた。その研究成果は後述する(2)の研究成果とともに、学会発表(「後期ボードリヤールの社会理論の社会学的検討 透明性、悪、無、不可能な交換」)、学術論文(「後期ボードリヤールの社会理論の社会学的検討」)としてまとめた。

(2)「不可能な交換」「悪」「完全犯罪」といった、後期ボードリヤールに特徴的な用語や造語を明確化するという課題の研究成果については、(1)の研究成果とともに、前述した学会発表、学術論文としてまとめた。(1)(2)の課題の研究成果の内容について端的に述べると、後期ボードリヤールの理論的叙述は、Z. バウマンやG. リッツァにしたがって、「ポストモダン社会理論」として捉えられ、そのため、情報社会論としてみれば、結局、後期ボードリヤールの社会理論は、「ポストモダン情報社会論」として捉えることが妥当だと判断した。そして、検討の結果、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論は、以下の3つの段階から、現代の情報化とそれによる社会的影響を記述していることが明らかとなった。

社会的領野の仮想現実化

社会的領野の現実からの乖離と相互浸透 悪による情報システムの攪乱

さらに、完全犯罪とは(1)を説明する概念、不可能な交換とは(2)の事態、すなわち、徹底的に情報化した社会的領野が実空間に準拠せず、それと対応関係をもたない事態を説明する概念であることが、それぞれ明らかとなった。ただし、上述した3段階はまだ素描されたに過ぎず、各段階の詳細については、後述する(3)の取り組みによってさらに検討されることとなった。

(3)後期ボードリヤールの社会理論の情報社会論としての再構成という課題については、上述したとおり、後期ボードリヤールの社会理論が3段階の構成をとるポストモダン情報社会論であることから、これら3段階の詳細について、精緻な検討を試みた。また、そこでは、ボードリヤールの二次文献、同時代の社会理論として、ドイツの社会理論家N. ボルツ、フランスの思想家P. ヴィリリオの著作を中心に検討し、後期ボードリヤールの情報社会論としての再構成の参考とするとともに、それらの理論的特徴についても比較検討した。以上の研究成果は、学会発表(「後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論のメディア論的検討」)学術論文(「後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論——N. ボルツのメディア理論との接合を目指して」)としてまとめた。なお、これらの研究成果では、主にボルツの社会理論を参考に、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論の検討結果をまとめた。以上の研究成果では、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論の第1段階である社会的領野の情報化の歴史的、思想的、技術的な背景が明かにされ、また、第3段階で指摘される情報化した社会的領野の攪乱(要因)が悪、カオスとして比喩的に説明されていることが明

らかにされている。

(4)最後に、ボードリヤールの社会理論の内外の諸分野における受容と影響の整理、その社会的、文化的意味の検討という課題についてであるが、研究期間の最終年度の後半に取り組んだこともあり、二次文献や関連文献、資料の検討に取り組んできたものの、学会発表、学術論文として成果をあげることはできなかった。それでも、研究の方向性やポイントについては目処をつけることはできたことは収穫であった。

総括と今後の展望、課題

以上のように、(4)については、具体的な研究成果をまとめることはできなかったものの、それ以外については、本研究は概ね成果をあげることができた。とはいえ、当初の研究プランでは、本研究の最終目標は研究成果全体をまとめた単著の書籍を出版することであったが、それを果たすことは、結局できなかった。今後、(4)の課題に取り組み、その成果を学術論文などにまとめた上で、書籍を出版することを是非とも目指したい。

他方、研究の内容に踏み込めば、後期ボードリヤールやボルツのポストモダン情報社会論によれば、社会的領野のすべてが情報化されるとするが、その場合、どのような社会的弊害や問題が生じるのか、さらにいえば、最晩年のボードリヤールが疑問を呈したように、そもそもすべてが情報化されないかもしれない。今後、これらの点について、検討を進めていきたい。

さて、ここまで後期ボードリヤールの理論的検討をおこなうなかで、多少の事例研究にも取り組んできたとはいえ、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論の実証研究をおこなったとはいえない。だが、冒頭で述べたように、本研究があくまでも、情報技術やそれに関連する科学技術が飛躍的に発展した情報社会の社会学的な検討、説明を、念頭においていることから、今後は、後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論の実証研究、すなわち、事例研究、量的調査研究に取り組むことも重要な研究課題だと考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

水原 俊博, 2015, 「後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論——N. ボルツのメディア理論との接合を目指して」

『信州大学人文科学論集』, 査読なし, 第2号, 81-89.

水原 俊博, 2014, 「後期ポードリヤールの社会理論の社会学的検討」『信州大学人文科学論集』, 査読なし, 第1号, 93-103, <https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/handle/10091/17469>.

〔学会発表〕(計2件)

水原 俊博, 2014.11.23, 「後期ポードリヤールのポストモダン情報社会論のメディア論的検討」第87回日本社会学会大会, 神戸大学, 兵庫県神戸市.

水原 俊博, 2013/10/12, 「後期ポードリヤールの社会理論の社会学的検討——透明性、悪、無、不可能な交換など」, 第86回日本社会学会大会, 慶応大学, 東京都港区.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水原 俊博 (MIZUHARA, Toshihiro)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 10409542